

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	村上寛
論文題目	マルグリット・ポレーの『単純な魂の鏡』における「滅却された魂」論 —意志と愛、知性と認識の観点から—
審査要旨	
<p>村上寛氏の博士論文公開審査会は2014年2月28日(金)13時から第7会議室で行われた。その時の各審査委員の評価、問題点指摘等を踏まえ以下審査報告を記す。</p> <p>本論文で採り上げられているマルグリット・ポレーと呼ばれる人物は、その思想が異端であると断罪されたにもかかわらず、自説を撤回することを拒み続け、1310年6月1日パリで生きたまま火刑に処された女性である。ポレーは信仰に基づく独身女性の生活共同体である「ベギン会」に所属していたとされてきた。</p> <p>一方、中世フランス語による写本、及びそのラテン語訳写本『単純な魂の鏡』という戯曲仕立ての神秘思想作品が一時リュースブルクの名の下に伝えられていたこともあり、時代が下った16世紀には、フランス宮廷でも読まれるほどに広く流布していた。</p> <p>1946年ガルニエリにより、この書の著者がマルグリット・ポレーであることが判明し、これを機に本格的なポレー研究が開始され、2010年にはポレーに関する国際学会も開催されるに至っている。</p> <p>本論文で筆者は、こうした研究史を受け、「第一部 ポレーの身分と異端」において、『単純な魂の鏡』で言及されているベギン批判およびポレー自身の立場の表明等の分析を通じて、ポレーがベギンであることに疑問を呈する見解を展開している。すなわちこれまで考えられていたように、ベギンであるポレーの思想がその後に出されたベギンの異端性を断罪する教令に証拠事例として引用されたというのではなく、ポレーとベギンとを教会側が意図的に結びつけることによって「ベギンの異端的思想」の具体的内容がポレーの思想から構成され、それがベギン一般の思想として教令で断罪されたのであるというこれまでにない解釈である。筆者はこうした解釈を、テキストにあるポレー自身の言葉を手がかりにして十分に説得力を持った論旨で提示している。ただし公開審査委員会ではこうした筆者の見解に対し、テキストの思想上の分析のみならず、広く歴史資料の分析も視野に入れないと確定的な結論は出せない問題であることが指摘され、今後の更なる慎重な検討が求められた。</p> <p>しかしながら本論文の最も評価すべき点は、戯曲仕立てというきわめて扱いづらい『単純な魂の鏡』という思弁的著作を中世神学の立場から論じた思想研究であるという点である。これまでも『単純な魂の鏡』にはクレルヴォーのベルナルドゥスやサン＝ティエリのギョームの修道院神学からの思想的影響があることが指摘されていたが、本論文の第二部、および第三部では、意志および知性認識の観点から『単純な魂の鏡』本文テキストが精緻に分析され、修道院神学を基礎としつつもさらにポレー独自の意志や知性の理解があることが明確に描き出されている。</p> <p>「第二部 意志概念と愛」においては、ポレーの意志概念がギョームのそれと比較考量され、神の意志としての聖霊が魂に注ぎ込み、一をもたらすというポレーの思想構造はギョームの言う霊の一致 (<i>unitas spiritus</i>) の思想と通じるものであり、霊の一致が聖霊それ自身であると言われていることについても同様であるとされる。しかしギョームがそのような一致の根拠を、人間が神の似姿 (<i>imago dei</i>) を持つものであることに由来させているのに対して、ポレーが根拠としているのが「滅却された魂」 (<i>ame adnientie</i>) の無性である点に両者の差異が示されていると結論されている。</p> <p>愛の知 (<i>L'Entendement d'Amour / intellectus amoris</i>) を巡る両者の思惟も、愛を真の知と見なす点において両者に強い思想的親近性があるものの、ギョームの愛、知が人間の側からの働きでもあるのに対して、ポレーのそれはあくまで魂の内で魂の働きなしに働く神の働きである点において、両者の思想的差異とポレーの思想的特徴が見て取れるとされる。</p>	

「第三部 知性認識とその構造」においては、ポレートの理性概念が取り扱われているが、ポレートの『鏡』における理性への評価は、一見苛烈なまでに否定的である。「理性」は「粗野なことしか理解せず」、理性に従う人々は愚かなロバであるとまで語られる。というのも、ポレートにおいては理性は被造的の世界における事物との関係に限定された認識、判断能力として受け取られ、またそれによって形成される形骸化した社会的規範による価値判断と見なされているからであると分析されている。特に理性の批判は登場人物としての「理性」の死として描き出されているが、それは理性の放棄ではなく、理性と魂という主従関係の逆転として理解すべき事柄である、とテキストの詳細な概念分析から結論づけている事は審査会でとくに評価された点であった。

また魂が完成に至るまでに辿る七つの段階のうちの第五段階にある「滅却された魂」の「自分自身は全くの悪である」という自己認識の内容解釈について、審査会では「悪」の概念がアウグスティヌス以来のスコラの存在論的理解とは異なるものではないかとの質問が出され、むしろポレートの独自性を見るためにはポレートの悪概念を認識論的観点から扱う必要があるのではないかという指摘もあった。キリスト教の神学的テーマが戯曲文学の体裁で記述された稀有な神秘思想作品である『単純な魂の鏡』は先行研究も少なく、どんな観点からその思想内容を理解すべきかが現在問われていると言える。

そうした国際的研究状況の中で日本におけるポレート思想研究のさきがけとしての本論文は、以上説明した通り多くの重要な観点を提供する、新たな知見に富む研究であり、今後のポレート研究が依拠すべき重要な解釈を提示しており、博士学位を授与するにふさわしい論文であると判定する。

公開審査会開催日	2014年 2月 28日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士(文学)早稲田大学	ドイツ神秘思想	田島照久
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	文学博士(パリ第4大)	中世フランス抒情詩	瀬戸直彦
審査委員	東京大学大学院人文社会系研究科教授	博士(文学)東京大学	西洋神秘思想	鶴岡賀雄
審査委員				
審査委員				